みんなで考えよう 人権・同和問題 No.217

このコーナーでは、隔月のシリーズで掲載しています。これを手がかりに、家庭で人権・同和問題について話し合ってみましょう。

『オリンピック』

誰も予想していなかった光景でした。15日間の競技を終えた昭和39年10月24日、東京オリンピック閉会式の入場行進でのことです。予定では、各国の旗手が入場したあと、選手団が国別に隊列を組んで整然と入ってくるはずでした。しかし、すべての競技を終えてリラックスしていた選手たちは係員の指示に従わず、入り乱れたまま会場になだれ込んだのです。腕を組み、肩を抱き、歌を歌い、互いをたたえながら楽しげに行進する選手たち。力を出し尽くして大会を終えた選手たちが、国家や競技の枠を超え、喜びや悔しさ、達成感などあらゆる感情をはじけさせた瞬間でした。このとき、まさしく『国境が消えた』のです。

この大会の出場選手の中に、欧米人への敵対意識を持つ日本人がいました。戦時中に空襲を経験している彼は、開会式から周りの外国人選手をにらみつけ、日本をどん底に突き落とした者には絶対に負けたくないという闘争心を前面に出していました。しかし、閉会式の和気あいあいとした雰囲気に触れ、いつまでも戦争のことに執着してはいけないと気づかされたそうです。

オリンピック憲章には、次のようなことが記されています。『憲章の定める権利および自由は、人種、肌の色、性別、性的指向、言語、宗教、政治的またはその他の意見、国あるいは社会のルーツ、財産、出自やその他の身分などの理由による、いかなる種類の差別も受けることなく、確実に享受されなければならない。』

8月、リオデジャネイロでオリンピックが開幕します。世界中の魅力的な選手たちによって、どんな美しいドラマが生まれるのか楽しみです。

第37回市美術展 幼児から大人までの力作が勢ぞろい

市美術展が、市民センターで5月11日から29日までありました。これは、市美術展実行委員会と市教育委員会が毎年開催しているもので、絵画や書、写真・工芸部門の作品を3期に分けて展示。各部門とも期間中多くの来場者が作品を鑑賞しました。

書部門展示の最終日（5月22日）には、会員や小・中学生による実技席書会が開かれました。多くの観客が見守る中、子どもたちは真剣な表情で、一文字ずつ丁寧に書いていました。

↑「特に『ち』を注意して書いた」と説明する桂城七菜（かつらぎ なな）さん（立花小4年・右から2人目）

郷土の文化財

腰岳と黒曜石シリーズ④

縄文時代の腰岳の黒曜石利用

今月は、縄文時代の遺跡の出土状況をみてみます。

縄文時代の腰岳周辺の主な遺跡の一つに、鈴桶（すずおけ）遺跡があります。

鈴桶遺跡は、腰岳の北西側丘陵・標高120メートル前後にあります。4000点以上ある出土遺物は、すべて石器で占められています。ここで見つかった大量の石器は、『鈴桶型石刃（せきじん）技法』という特徴的な石器製作の技術を示していることから、この遺跡は主に約4000年前～3000年前の縄文時代のものと推測されています。

この鈴桶型石刃技法は、下の写真のような縦長の石刃を連続的に剥離（はくり）する技術です。製作された石刃は、特定の石器の素材となります。鈴桶遺跡では、腰岳の豊富な黒曜石（こくようせき）を利用してこの石刃を大量生産していたと考えられます。また、土器は一切出土しておらず、生活していた場所ではなく、石器作りのためだけに短期間滞在していた場所であると考えられます。

このような遺跡が残されていることも、腰岳周辺ならではの状況と言えます。

↑黒曜石で製作された鈴桶型石刃とその石核（せきかく）

●問合先　生涯学習課文化財係（☎㉓3186）